

平成29年12月5日

平成29及び30年度 小田原森里川海インキュベーション事業“寄気”

中間報告会資料

地域の自立に資するFEC+M自給圏の 創出に関する研究と実践

研究代表者：東京農工大学 中山政行

研究協力者：合同会社小田原かなごてファーム
(おだわら環境志民ネットワーク)

小山田大和



Agenda

事業内容

現時点までの進捗状況および成果物

ここまでの課題点

これからの事業展開（今年度、次年度）

事業内容（目的）

本研究では森里川海といった地域資源を上手に活用することで、生活や暮らしに必要なものは大抵賄えるという共通認識のもと、食・エネルギー・ケア・お金の地域循環を促すことができれば、地域の自立や分散型社会の形成に貢献できると考え、**FEC（食・エネルギー・ケア）+M（お金）自給圏を小田原で創出すること**を目的としている。

※FECとは：経済評論家の内橋克人氏が提言している構想で、「F」は「Foods（食糧）」、「E」は「Energy（自然・再生可能エネルギー）」、「C」は「Care（人間関係、医療、介護、福祉、教育など）」の頭文字である。食糧とエネルギーを確保することは、人間が生きていく上での最小限の条件であり、さらにケアを自給することが、コミュニティの生存条件を強くし、雇用を生み出し、地域が自立することにつながるという考え。

+Mの「M」は「Money（お金）」であり、健全な地域内経済循環を行うことを目的に付加した。



再生可能エネルギー
の普及・定着

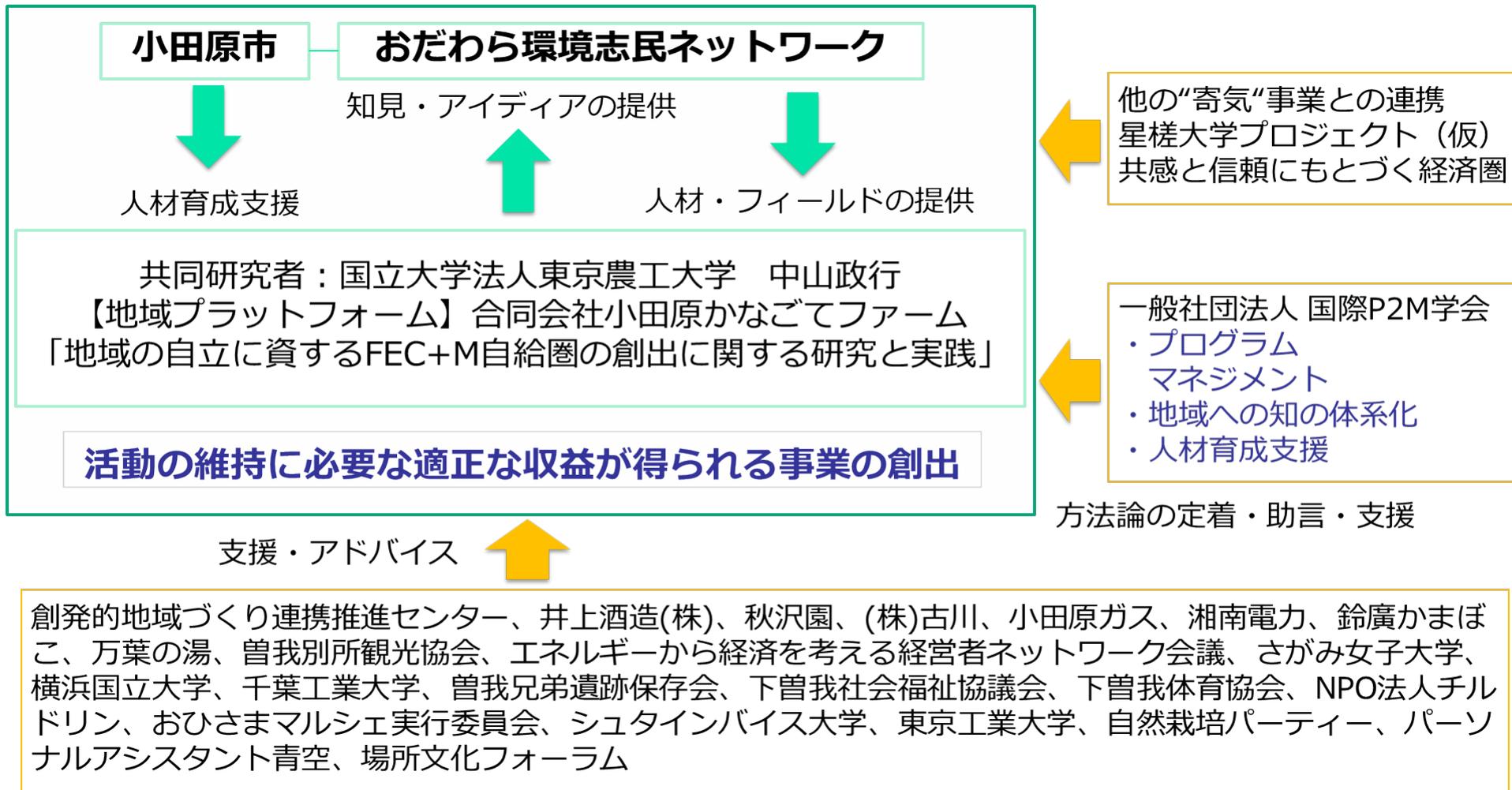


耕作放棄地の
維持・再生



再生・維持した農地で生
産された作物の商品化₂

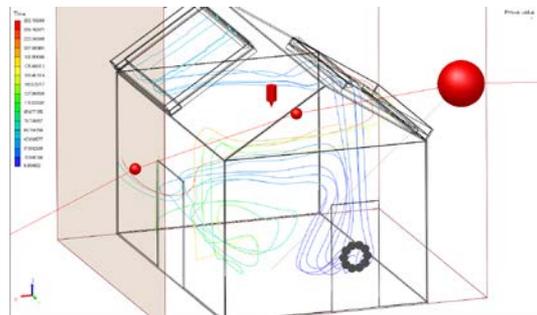
事業内容（活動体制）



事業内容（研究全体の概要）

FEC（食・エネルギー・ケア）+M（お金）自給圏は、**地域が直面する課題の解決**と共に考えなくてはならない。このため、取り扱う対象は人・モノ・お金・場所など多岐にわたる。我々は**8年間、小田原を中心とした活動**を通じて、FEC（食・エネルギー・ケア）+M（お金）自給圏を実現する活動全体の枠組みを設定した。

- 1) 農地の維持（農産物の高付加価値化、再エネとの連携）
- 2) 活動に共感が生まれる機会の提供（共感の連鎖）
- 3) 交流人口の増加（世代を超えた地域と都市市民の交流）
- 4) 地域の未来を担う人材を育成
- 5) 経済的に自立（域内経済循環）



事業内容（研究対象）

本事業ではこのうち、2つの事業を実施する。

(1) フィールドワークと商品開発会議の実施

農地の維持×活動に共感が生まれる機会の提供×
地域の未来を担う人材を育成×経済的に自立

学生らを伴った現場でのフィールドワーク(田植、収穫祭、現地見学など)を通じて、地域における森里川海の価値を新商品の開発・ブランディングに生かす。また、学生らの発想力・発信力・行動力を活用した商品企画会議を実施し、商品化まで実現する。域内経済循環を図るため、**地域内の企業の協力**を得ながら商品化を行う。



事業内容（研究対象）

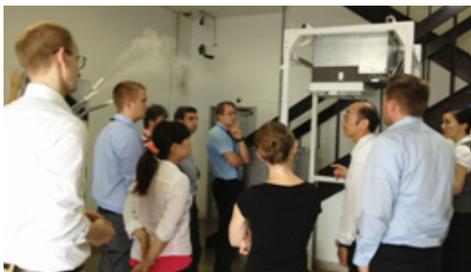
(2) 国際文化交流プログラムの実施

(ドイツシュタインバイス大学日本研修の受入れ)

**活動に共感が生まれる機会の提供×交流人口の増加×
地域の未来を担う人材を育成×経済的に自立**

(地域資源を活用したインバウンドツーリズムの実現可能性)

シュタインバイス大学の学生受入れに際して、小田原・足柄地域(酒匂川流域)の森里川海資源について、受入ホスト役となる東京農工大、東京工業大、横浜国立大学の学生と地域リーダーが共にフィールド調査を実施する。これに基づいた国際文化交流プログラムについて、地域の受入れ協力者の助言を得ながら日本側学生が立案する。





Agenda

事業内容

現時点までの進捗状況および成果物

ここまでの課題点

これからの事業展開（今年度、次年度）

現時点までの進捗状況および成果物

(1) フィールドワークと商品開発会議の実施

6/3にフィールドワークとして、田植を実施。

地元親子、都市部の方々、相模女子大学、東京農工大学の学生など40名が参加。

10/22の収穫祭は台風のため中止。(10/25に地元のみで実施)

→**農地を維持**



現時点までの進捗状況および成果物

(1) フィールドワークと商品開発会議の実施

これまで生産してきたおひるねみかんジュースと
井上酒造さんの日本酒とのコラボである

「おひるねスパークリング酒」を開発

相模女子大の方々にパッケージデザインをしていただいた



現時点までの進捗状況および成果物

(2) ドイツのシュタインバイス大学日本研修の実施

7/16にシュタインバイス大学日本研究を実施

■参加者 **合計96名**

日本側：36名

- ・大学院生

(東京農工大学、東京工業大学、横浜国立大学)

- ・企業の若手社員

ドイツ側：60名

- ・シュタインバイス大学の社会人大学院生

日本側の参加者は**ホストの役割**を担い、**地域の受け入れ側と共に地域資源を生かしたインバウンドツアーを企画**し、シュタインバイス大学の学生を**ゲスト**として迎え入れる国際交流プログラムを試行した

現時点までの進捗状況および成果物

文化、歴史、エネルギー、食文化をはじめとする地域資源を活用した8つのプログラム

No.	場所	国際文化交流プログラム	定員	日本	独
1	小田原市	小田原城と清閑亭を巡る	8	3	5
2	小田原市	都市近郊型林業の現状と再生エネルギーの視察	4	2	2
3	小田原市	地元食文化（かまぼこ・ちくわ）手作り体験	20	7	13
4	南足柄	大雄山最乗寺での座禅・写経体験	24	9	15
5	松田町	寄地区での地域ワークショップ（ロケットストーブ制作）体験	8	3	5
6	大井町	酒蔵見学と課題解決ワークショップ	8	3	5
7	酒匂川流域	瀬戸屋敷と酒匂川の治水史を巡る	6	3	3
8	酒匂川流域	酒匂川流域自然エネルギーツアー	18	6	12
合計			96	36	60



現時点までの進捗状況および成果物

プログラム参加者、周辺自治体の首長交えた交流会



現時点までの進捗状況および成果物

(2) ドイツのシュタインバイス大学日本研修の実施

国際文化交流プログラムの内容や満足度、課題について

アンケート調査を実施

「地域資源を活用したインバウンド戦略と地域ビジネスへの発展に関する研究」としてまとめ、国際プロジェクト&プログラムマネジメント学会2017年秋季大会@青山学院大学で発表した。また、「インバウンド産業雇用創生に向けた国際P2M学会の役割と期待」のパネルディスカッションにおいてパネリストとして登壇した。

国際プロジェクト&プログラムマネジメント学会秋季研究発表大会予稿集,pp.102-114,2017

(Doi : http://doi.org/10.20702/iappmproc.2017.Autumn.0_11)





Agenda

事業内容

現時点までの進捗状況および成果物

ここまでの課題点

これからの事業展開（今年度、次年度）

ここまでの課題点

(1) フィールドワークと商品開発会議の実施

フィールドワーク(田植、収穫祭、現地見学などのイベント)と商品開発会議の事業実施において、問題や課題は発生しなかった。

しかしながら、日々の農地維持に携わる人材不足は課題となっている。事業の中核を担う主体は存在するが、作業を**支援する人材が不足**しているため、**主体への負担が大きい**状況である。作業を支援いただける地元の人材バンクのような仕組みをおだわら環境市民ネットワーク会員の方々と検討したい。

(2) ドイツのシュタインバイス大学日本研修の実施

事業実施の上で問題や課題は発生しなかった。

本事業を地域はどのように生かすかについて検討する必要がある。

今回、地域側の受入れ協力者は、皆ボランティアとして協力をしてくださった。活動を継続していくためにはインセンティブの設定が必要と考える。

インセンティブには、金銭的なもの、精神的なもの等様々存在するが、地域ビジネスへの発展性を議論する上では、検討すべき重要な課題である。本事業を通じて得た知見から、**個人の利得と地域全体の利得の両者を得られる仕組み**はどのようにすれば構築できるかを検討したい。

ここまでの課題点

本事業を通じた好例の紹介

酒蔵見学では、見学に加えて課題解決ワークショップを実施した。酒蔵では10数年前にドイツへ**日本酒の輸出**をしていた。しかし、思うように売り上げが伸びなかったため撤退したという過去があった。この話は国際文化交流プログラム実施前の企画発表会において共有された。この企画発表会において、なぜ、ドイツでの売り上げが悪かったのか、直接ドイツの方々からコメントをもらおうという提案がされ、**課題解決ワークショップを企画**することになった。これは、地域側の協力者である酒蔵にとっても意義のある機会となり、個の利得を満たしながら全体の利得を高める好例になったといえる。



ここまでの課題点

(2) ドイツのシュタインバイス大学日本研修の実施

アンケート調査結果の活用とおだわら環境市民ネットワーク会員の方々のさらなるご支援・ご協力によるプログラムの充実化を図ることができれば、地域資源を活用したインバウンドツアーの実現可能性があると考えている。

アンケート調査の結果、**「地域資源を生かしたワークショップ」**が**高い評価を得た**。その理由を問うた設問では、**「こうした機会が今まであっただろうか。地域に誇りを持ったAさんの人格が素晴らしかった。エキサイティングな体験をさせてもらった」という回答であった**。このツアーに参加するために、いくら支払いますか？の問いに対しては、15~230ユーロと幅はあるものの、**参加した5名の平均が135ユーロ**とお金を払ってでも参加したいというプログラムであった。

ここまでの課題点

プログラムの内容としては、地域の住民や子供たちとロケットストーブを製作するというものであり、その後、近隣の川で遊ぶというものであった。**日本人学生を対象とした事前アンケート（プログラム実施前）では、ホストを希望する者が少なかったため、一見見落としてしまいそうな価値がそこにあった。**



ここまでの課題点

あなたは知り合いにこのツアーを勧めたいと思いますか？の問いに対しては、**全体の66%が積極的に勧める、勧める**と回答しており、その理由として、「**私たちのガイドは彼らが私たちに説明することを非常に誇りに思っていた。それはとても印象的でした。**」との回答が複数あった。

国際文化交流プログラムそのものの内容としての価値も重要であるが、それを**ガイドし地域の魅力を発信することの価値も重要な評価指標**になることを認識した。

ここまでの課題点

（３）自立のための経済的な仕組みづくり（次年度にかけて）
現在、（１）の事業により生産され、加工し販売されているおひるねみかんジュースの原価は180円（人件費を含まず）であり、**販売価格は300円**であるが、卸値は210円~となっている。**実質の収益は30円/1本程度**であり、これでは**持続が難しい**。

星槎大学チーム「**共感と信頼にもとづく経済圏**」との連携でブランディングを行うことで、地域の産物を積極的に地域で消費したいと思う仕組みづくりやブランディングした商品をまとめることで、スケールメリットを生かした原価削減など具体的な取り組みを検討したい。

（例：まずは自治体や商工会議所などが積極的に地元産物を活用するなどの指針を決めるなど具体的で実現可能性が高いものとして。）



Agenda

事業内容

現時点までの進捗状況および成果物

ここまでの課題点

これからの事業展開（今年度、次年度）

これからの事業展開（今年度）

(1) フィールドワークと商品開発会議の実施、
(2) 国際文化交流プログラムの実施（ドイツシュタインバイス大学日本研修の受け入れ）の両事業は
計画通り実施し、事業は完了した。

(3) 持続のための経済的な仕組みづくりの検討
星槎大学チームとの連携（6/1に事前打合せを実施）

「共感と信頼にもとづく経済圏」

(1) で生産された作物、開発された商品
(2) で企画された国際文化交流プログラム
(インバウンド振興産業創出の可能性)

などの材料をベースに
ブランディングなどの検討を行う

これからの事業展開（次年度：予定）

- (1) フィールドワークと商品開発会議の実施、
- (2) 国際文化交流プログラムの実施（ドイツシュタインバイス大学日本研修の受け入れ）の両事業の継続的な実施
これらの事業を通じた次世代人材と主体となるうる**人材の発掘**。おだわら環境市民ネットワークを中心とした地域としての受け入れ環境づくり。
- (3) 自立・持続のための経済的な仕組みづくりと支援基盤づくり
次世代人材が**本腰を入れて活動**ができるようにするための**支援基盤づくり**。
(例：地域づくりや地域資源を活用した事業を実施したいと思う人材が、2~3年程度実践的なトライアルが可能となるような経済的支援（最低限の資金）とポスト（身分）を準備する。小田原版地域おこし協力隊のようなものを想定)

